

市町村教委（北信地区）と県教委との懇談会【概要】

1 日 時 平成 23 年 7 月 26 日（火） 13:30～16:00

2 場 所 長野合同庁舎 501～503会議室

3 協議事項

(1) 中学校 30 人規模学級編成について

【県教委】

基本的には私どもとして、中学校の 30 人規模学級編成につきましては、学年進行によって、中学 2 年、3 年に、順次拡大をしていきたいと考えている。

中学校 30 人規模学級編成の拡大に関する検討案として A 案、B 案を説明した。県とすれば、中学校 2、3 学年に順次拡大していきたいと考えているが、市町村教委のお考えはどうであるかを確認させていただきたい。

A 案は、中学校 30 人規模学級を中学校 2、3 学年へ学年進行により拡大をする。

B 案は、活用方法選択型教員配置事業を現行メニューのまま実施し、当面、第 1 学年にとどめる。

【市町村教委】

実は大変、二者択一という学校で難しい部分であるが、まず、中学 1 年に 30 人規模学級を導入したところの保護者、住民の反応は、大変素晴らしいものでした。

導入した 2 つの中学校の保護者からは大変喜んでいて、それから学校訪問をした段階でも、やはり人数が少ないとクラスづくりでも、いいと我々自身も感じている。

私どもとすれば、是非、学年進行をお願いしたい、中学 2 年への拡大をお願いしたい。

活用方法選択型教員配置事業のメニューとの問題があるが、二者択一となれば、A 案が私どもの考えである。活用方法選択型も素晴らしい事業であるので、現状のメニューも出来るだけ活かせる形をお願いしたい。

【市町村教委】

今の A 案に賛成。続いて、その場合に、やってみて学校現場では、学級数が増えることによって授業時数が基本的に増える。専科教員がいなくなる事で、一番困っているのが、理科と社会の先生が非常に忙しくなった。いずれ専科の数とも絡んでくると思うが、私は専科が学級数に合わせて、専科が 1 増えれば、それでことは足りないだろうと思う。もっと言えば、その 1 は、例えば、理科と社会の両方免許を持っている人とする、そういうことをやらないと中学校は上手く回らないのではないかと考えている。

【市町村教委】

私も基本的には、このまま学年進行を続けていただきたいので、A 案に賛成。

基本的に、やはり学級経営が安定する状態を作るには、今、子ども達の間にある不登校や色々な問題を抱えている家庭の問題も含めて、抱えている子ども達が多いので、担任の先生が学級経営を安定して出来る学級にしていきたいと思うので、少なく、出来るだけ少ない編制が良いと考えるので、A 案で進めていただければありがたい。

【市町村教委】

私も基本的には A 案に賛成であるが、しかし、私どもみたいに、もう 30 人前後の人

数になっている学校にとっては、やはり手厚く1人1人を大事にするきめ細やかなプランみたいなものを是非、大事に扱っていただきたい。

例えば、小学校で、今その形で実施して頂いているが、それによってかなり、子ども達1人1人に、手厚く指導していける状態が、日常の中で実践されてきている感じを受ける。これは、当然、即学力向上に繋がるかどうかは先に置いたとしても、生徒指導上いろんな面で、問題を抱えている生徒達を、所謂30人前後の中で1人の担任が面倒を見ていることは非常に難しい状況がある。

その面でも、きめ細やかな指導が出来る配慮を是非、お願いしたい。

【市町村教委】

当町では、理科と社会がやはり厳しくなっていて、学級担任云々ということがあるので、まずは理科の職員を学級担任外して、専科の方に専念して、なんとか今、対応している。そのため、後1人欲しいと言った時に、どういう評価になるか分からないが、理科と社会の免許を両方持っている先生1人であれば、なんとか良いという話が出てくる。それは各学校の状況によって違ってくると思うが、いずれにしても義務教育等々には、中学の先生を採用する時には出来るだけ普通免許を持っている先生にやっていかなければ、学校の中は回っていかないだろうと思う。

【市町村教委】

↑中学校は今年、少人数学級編成で2学級にした。3週間くらいして、学校訪問したら、2年生のところは38人くらい、教室がいっぱい、1年生のところは、16、7人くらい、非常に伸びやかに授業をしていた。一番課題であった不登校の子どもの関係で、中1の学年の子ども達は、今のところ7月まで全員登校している。夏休みを過ぎるとどうなるか判らないが、学校訪問の最後の全体会の中で、先生方から、それから保護者から、1年の評価が非常に見えやすい学年だった。

今の免許の関係のところ、現場でこの決定が遅ければ、人事はかなり進んでいるので専科の先生のところ、上手く校内操作できない。

↑中学校では、複数免許の先生方が実際にいるが、その2つの免許を使われていない現実がある。例えば、小1と中の数学を持っていた場合に、小学校に入ると、小学校を回ったまま40代、50代にきている。2つ目の免許を使われない先生方がかなりいる。

今年、小から中へ1人、是非2つ目の免許を使って欲しいということで、小から中への異動をしていただいた。2つの免許がある場合は、10年なら10年という期間の中で必ずそれを使って欲しいというものが無い限りは、その2つの免許を持っていても、使われないでそのまま40代、50代になってしまう。

私は個人的には出来るだけ早い、若いうちに2つの免許を使って欲しいと思っている。

この制度を進めていく場合に、その部分が中学1、2、3学年進行する場合には、極めて大きな課題になるので、その配慮をしていただかないと、なかなか中、小規模では、この学級編成が、A案が難しい。是非その辺のご配慮を頂ければありがたい。

【県教委】

今のように複数免許は、基本的には、小学校免許、中学校免許ですが、私どもがもっと要求しているのは、中学校でも更に複数の免許が欲しい。まさに小、中規模校になると、例えば、美術などその学校においては、6時間くらいで終わってしまう、それで後の29コマの殆どは時間がある。それでは困るということで異動が出来ないことがある。ところが国語の免許を持っていると、国語と美術を教えることで、その学校に位置付くことがあるため、可能な限り、中学校の複数免許、これが欲しいのが一番の願いである。

ただ、そうもいかないなので、今のように、小から中へ異動をかけて、なんとか教科の免許を確保することについては、また校長会でもお話をして、そういう方向で上手くいくよう考えていきたいと思っているので、御意見を参考にさせていただきたい。

【市町村教委】

基本的に年次ごとに増やして頂く形で良いが、基本的には学級の人数を少なくして、担任が子ども達1人1人を見られる形にしていくことが1番基本だと思う。

そのため、是非、2年、3年も、所謂30人規模学級を進めて行かなければと思う。

それで、例えば不登校やその他、所謂少人数指導の加配が少なくなる点はあるが、現実の問題として、不登校等は、去年あたりから配置されるのは、ある程度規模の大きい学校しか配置されていない。その部分を我々単費で加配している形もある。多少県の配置が少なくなっても困ると思うが、是非基本的な部分で、1学級の子ども達の人数を少なくすることによって担任がきちんと1人1人の子ども達を見ていく、そういうこともまた、ある意味で不登校対策にも繋がる部分もあると考える。

少人数指導を色々長い間やってきていただいているが、現場の方で上手く使いこなしている部分も、多少あるわけで、例えばTTという形、または習熟度別という形でやってきているが、それは具体的にどの程度、どういう効果があったかという点については、ちょっと私達の方でも確認できないものがある。是非、基本的な部分で学級数を少なくしてみる、これを全学年で進めてもらう事が良いと思っている。

【県教委】

少人数学習を長年実施しているが、なかなか成果として現れていないのではないかとご意見だが、そのところについては、データ化して本当に成果が上がったか上がらないか検証しなければいけないと思っている。

現在は31人以上のところについては加配をして少人数学習を行っているが、それを36人以上まで少し見直しをすれば、なんとかそんなに教員数を減らさなくても少人数学級は可能ではないかというのが2案である。少人数学習よりも、少人数学級へ少しウェイトをかけていくということについてご意見をいただきたい。

【市町村教委】

私達は今、色々考え始めているが、まだ手応えが得られていないので、これから詰めていかなければいけないと思っている。今、言われたように生活集団をきちんと作っていくのを基本にして、今はそれでいいと思う。きっとそれを底辺に進めているとそこに付随した課題が沢山出てくると思うが、それはまた1つ1つ考えることにして、基本線はそこに置いてもらえればありがたいと思う。

【市町村教委】

出来るだけ確かに学級を少なくしていく、いわゆる学級編成を40人以下の学級にして、本当に1人1人の先生が、生徒1人1人をしっかりと生活指導、或いは学力向上などいろんな面で手が入っていると思うので、そういう意味では大事だと思うが、例えば、私達の方で、昨年、小学校3年ので、37名おりましたので、2学級編成にしておりました。今年はそれが転校して36名になり、1人が支援学級に入りましたので35名ということで1学級になった。それで本当に生徒を掌握するのは大変であるのかどうか、あるいは2クラスになった19と18だったが、その時、非常に不安定な中、教育経営が行われておりました、これはもう、もし1つになったらこれはどうなるかと心配していたが、実は1クラスになった途端、非常に落ち着いた状況があり、あんまり人数にはこだわられ

ないかなということも実はありました。

そういう意味では、やっぱり先生方の力、指導の力みたいなものが、今年ちょっと変わって違う先生が入ったので、その先生が非常に掌握力、指導力が強いと言うか、或いは全ての面があると思いますが、そのために非常に生徒が安定して、そして授業はかえって、1クラスになったけれども、落ち着いてきたりと、そういう意味ではやっぱり先生方1人1人の指導力の力を伸ばしてもらう職員の研修の大事さ、或いはそういう先生を配置していただくことが、非常に私は重要だと感じている。そんな面でも是非、先生方1人1人の基礎の力をつけていただけるような、そんな配慮を是非お願いしたい。

【市町村教委】

実はうちの小学校2校を今年の4月に統合して、全校児童数85名である。

私も今まで小さいクラスを見ていたが、統合して14とか15人の子ども達の教室の中の動き、これを担任の先生との関わりの中で、これくらいの人数がひとつの学級として、一番いいかなと思っている。

もう1つの小学校は、全校で6人。全部複式ですが、先生方がいくら一生懸命頑張っても、子ども達2人とかで先生1人で、1年中やるので、先生も子ども達も大変。

そうした1人、2人との上手く対面の授業、その中での少人数学級では、私も、14、15人、今の人数辺が一番いい。残念ながら、この人数がどれくらい続くのか、まだまだ少なくなってくることで非常に心配している。

【県教委】

学級を細かくして学級数を増やすと、それだけ担任が必要になるが、現実はそのだけ担任ができる教員がいるかどうかという問題が学校現場では切実な問題だと思う。

そういう面で、講師が担任をしている場合もある。背景としては、不安定学級がひとつの要因としてあり、どちらになるか分からないので、正規教員を配置することもいかないので、欠員補充という形での講師を担任に充てる場合と、正規教員だが、様々な事情で担任に充てられない場合とがある。そんな点で、教員の研修と採用の問題も絡んでくる。そういう面では学級の基盤をきちんとさせるには、何と言っても教員の資質以上のものは無い。その辺も私どもの課題として充分認識しながら、学校現場、或いは市町村教委にとって一番良い方法は何かについて、今日頂いた御意見等を基にしながら、また研究をさせて頂きたいと思っている。

【県教委】

教室や備品等の不足といった導入したいけれども、理科室が足りないというところが出てきているため、少人数学習との選択制としている。

ただ、2案でいくと、36人以上の学年に1人、数学や英語という配当になるので、35人を超える基準での少人数学習との併用となる。現行は31人以上の場合ですが、それが35人を超えたところでの少人数学習の併用ということになる。

来年度、英語だけではなく、例えば国語も2年生で、週4時間になれば1時間増える。社会科は3年生が一気に55時間増えてくる。そうした時数増に対して、文科省は定数改善をしていない。それは選択教科が減るので、その分増やさなくても良いだろうとのこと。しかし、美術や技術の技能系の教科の先生は、その分どこかの授業を出来るかという出来ない。したがって、定数改善をこの30人規模学級で教員を増やしていく、免許を持っているものと同時に指導時数への対応ということも考えて、やはり教員採用はしていく必要があると今考えている。

【県教委】

平成 25 年の第 2 案の場合は、30 人規模学級を全部が選択したら、選択制を取れなくなるということか。少人数学習編成は、教員の数としては無くなると考えるか。

【県教委】

全部が、選択した場合、30 人学級を選択すれば、全部学級担任となるため、少人数学級の先生は居なくなる。

【県教委】

方向とすれば、2 案の方がより現実的だと思う。従って、少人数学習が撤退できない状況ではないと思う。ただ、免許等の絡みもあるので、もし少人数学習をしたいと言うことになれば、これは人事異動で人材を確保することが必要になってくると思っている。

25 年までに校長等とよく相談をして頂いて、こういう方向で行くならば、こういう免許の人材が必要だということを、あらかじめ、校内でシミュレーションして頂ければと思っている。いずれにしてもこれは、あくまでも 1 例なので、これで決定ではない。皆様方の御意見を頂きながら、更に詰めていきたいと思っている。

(2) 学力・体力の向上について

【市町村教委】

今、まさに中学校自体、ここで小中連携を基盤とした学力向上を推進する小委員会を、本年度立ち上げた。更に具体的な組織や内容を強化して、ここで出たことを社会教育委員との懇談会にも使って、学校教育と社会教育を中学校単位で地域と家庭にも学校の取り組みを理解してもらうことを考えている。

この中で、中 1 ギャップであるとか、それぞれ中学校のブロック単位の中での小委員会を中心に学力向上の関係も含めて、検討を進めている。

NRT と CRT の関係ですが、基本的には学校長の判断に任せる。予算は市費で全額負担している。CRT を導入している学校、NRT を導入している学校と統一をする議論もしたが、やはりそれぞれ絶対評価、相対評価等の問題があり、一長一短があるので、それについては各学校長の判断でやっているのが実態。

それから全国学力であるが、当初は県で 2 分の 1 負担を頂いて、取り入れることでやってきたが、東日本大震災等の関係で、決定する時期が不明確になってきたことがあって、本年度は参加しない。資料だけ提供を受けて、是非これを有効に活用して取り組んでいきたい。

体力向上の関係は、まさに 1 校 1 運動ということで、以前やっていたものを更に発展させる学校が多いと思っている。

どちらかというと、学力に力を入れていた気がするが、小規模校もあるので、縦割りで、1 校 1 運動を取り入れて実施をしている。とりあえずは 1 校 1 運動で行こうと、ブロック単位で共通した目標を持ったらどうか、こんなことも検討し、新しいものが出たら、それをなんとか既存の組織を上手に使うって、発展させるよう取り組みをしていく。

【市町村教委】

学力は大きく分けると 3 つ。中学校区の小中連携学力向上は、3 年、4 年程前から、まずテーマを揃えよう進めて、その時、県から丁度、小中連携事業の加配の先生を頂いて、ここ 2 年ほどは本当に連携がきちんとできつつある。意識の問題が非常に大きいと思う。教師、学校の意識をどう変えるかが大きな問題になっている。また、単費で 1 名

加配をつけている。小学校へ行って小学校の先生と IT で指導をしている。それと同時に、特に算数の専門でない先生方の教室へ入って、中学の専門の先生が授業をすることで、授業指導が実施される形が少しずつ出てきているので、これも大事だと思う。

二つ目の中高交流は、県から高校へ1名、中学へ1名加配を頂いてやっており、非常に効果がある。それぞれ高校の先生も小学校へ来て、実際に授業はやらないが、授業参観を先生方がやっていく中で、数学を中心ですが、どこが高校まで尾をひいているのか、そこをどう指導するかを今やっている。それと同時に、それに基づいた指導計画を作っていくことで、今、飯山カリキュラムの形で名前をつけて作り始めている。

もう一つ、中学高校のこれからの大きなポイントだが、家庭学習のあり方を進めたり、スリーステップペーパーということで進めている。中高交流は大変な、効果がでてきているので、是非これからも続けていきたい。

三つ目の小学校の英語だが、当市としては ALT を2名小学校に雇用しており、実際にやっていくと、5、6年の先生方がイニシアティブを取って授業を進めていくのはなかなか難しい。そのため、講師をお願いして、英語の先生かつて ALT だった人をお願いして、5、6年の先生に授業の参加の仕方をどうしたら良いかという事を指導頂いている。

いずれにしても、学力は、勿論、基本的には先生方の力をどう高めるかだと思っているので、色々方法を取り入れながら、先生方の力を高めていきたいと思っている。

体力は、ひとつは保小の連携をした運動機能向上のプロジェクトをやっている。

柳澤プログラムを全保育園で実施し、それに基づきながら、小学校の低学年にどう入れてくるかという事で考えている。

これは体育、所謂運動機能だけではなくて、ゆくゆくは、所謂保育園の生活から小学校の生活へどうスムーズに橋渡ししていくかという生活全般、学校生活、保育園生活全般についての橋渡しのカリキュラムにしていきたいと思っている。

今年から、まず柳澤プログラムを中心にしたものを初めとして、進めていきたいと考えている。

【市町村教委】

当町では、学力問題検討委員会を設置し、主にやることは NRT の結果をどう各学校で活用していくかと、そういった連絡調整をやっている。

昨年度までは算数ドリルを各学校に配ってあるので、今年はその利用等についてある程度定着していると考えている。併せて校長会では、PDCA サイクルには各学校参加するように話をしている。

体力は、主にクロスカントリースキーであるが、各学校では、よく朝ドリル、朝読書などがあるが、学校によっては朝の運動の時間を進めたり、昼休みの清掃の後に遊び時間を位置づけるなど各学校とも、色々な特徴があるが、位置づけて取組みをいっている。

【市町村教委】

私、変わってもらいたいのは、水泳指導であれば、先生自身が子どもと一緒に水中を進む、息をする、回転する、水を楽しむ、そういう子どもの感覚を先生も受け取ってもらえる担任になってもらいたい。体力向上もあるが、その子の感性、興味関心力といい、学力にも通じるものである。

学力向上について感じている事は、色々あるがその中でたったひとつ大事に思うことは、授業を公開すること。授業を保護者も含めて、村の方々に公開していく。そういう中で、色々な角度から、授業改善が一層進むきっかけがそこにあるのではないかと。授業公開を通しながら、「子どもの学び」を育てることを先生方と地域の人と一緒に考えていくことを一つのキーポイントに今年はしている。

それから、体力の向上は、1人1校1工夫の活動の実施をしている。私達、今年3つの小学校が統合して2年目になるが、スクールバスを拡大して欲しいという保護者とよく話し合いを重ねながら、徒歩通学をできるだけ大事にしようということで、統合してきたことは1つ良かったと思っている。

もう1つ、放課後の子ども達の生活をどう作ったらいいのか、昨年度から放課後子ども教室を立ち上げたところ、これがひとつ面白い結果を生んでくるのではないかと、是非成果を出していきたい。

【県教委】

学力の関係で、NRT、CRTを実施して、11年目とあるが、何か成果的なもの、或いはこの活用の仕方というもので、工夫されていることは。

【市町村教委】

まだ、そこら辺のことは数値として、分析がまだ出来ていない。ただ、小学校は、初め4教科で小学校はスタートしたが、現在、4年生以上が2教科、国語と算数、中学校は、5教科を原則として、11年間、実施してきている。中学校はNRT、小学校はCRTを実施している。ここも皆さんの色々な意見を聞きながら、もう少し追求をしていきたいと思っている。

【市町村教委】

学力向上だが、英語を小学校1年生から中学の3年生まで、或いは高校の先生に来て頂いて、一緒に授業を実施していただいている。なお、小学校高学年は、中学と一緒にジェットのALTの先生を配置してもらって、小学校の低学年は単費で年間80万ほどつけて、活動をして頂いて、楽しく遊びを兼ねた授業を小学校低学年ではやっている。

特に中学校で、どんな変化があるのかということで、校長先生も一緒になって、研究等に携わって頂いており、中学の1、2年生の英語に対する取り組みが非常に良くて、変わってきている。更に、高校へ入っていく時のために、特に中学校のカリキュラム、或いは高校のカリキュラムも考えていかなければならないことが検討されている。

それから、中学校の理科の先生が年に2、3回、小学校の生徒を中学校へ呼んで、実験観察を中心にした授業を実施していただいている。これもやはり、小学校の生徒が目の輝きが違う。授業に非常に興味を持って小学校の先生の教えるのを聞いている状況が生まれ始めてきている。それからNRTをここ7、8年続けており、もう少し分析や校内検討をやって1人1人の生徒が、どこがいけないのか、数学だけではなく、生徒の向上に繋がることを各校へ繋げて行けるものと考えていきたい。

体力向上だが、特に冬場の運動不足、校庭が雪にすっぽり覆われるので、昨年からは圧雪車を利用して、校庭を踏み固めてもらい、自由に飛びまわれるよう、さらには、体育の授業にクロスカントリーを実施できるよう、担任教師が指導者となって、今小学校で取り組んでいる。それからもうひとつは、放課後子ども教室を2年ほど前から実施して、去年からは、3日間行い、体育館、それから公民館、グラウンド体育館、それからあと1日は学校の空き教室、体育館を利用している。これは勉強させたり、ドッジボールだとかをさせる形を取ったりして、大いに自由に飛び跳ねて運動している状況である。

【市町村教委】

学力の関係だが、私達、教職員会で、学習診断学力向上に向け、立ち上げていただいた。CRTを単費ですずっとやってきた。やってきたので全国学テの傾向等は、CRTの中で、ほぼ同じことで、大体このくらいかと感じていた。その中で、少人数教育について、先

生達が自信を持って臨めるよう、学力については進めている。

体力の関係だが、最近の若いお母さん達、公園が無いとか、遊ぶ場所が無いと言う。周りに自然公園だけだと言ってもなかなかそうもいかない。

通学を徒歩ということがありましたが、今は、熊も出るわ、猿も出るは、猪は出てくる、こういうようなことで、歩かせたいが、歩かせられない状態で、今スクールバスを使っていることで、非常にそのところは残念である。

体力については、社会教育で、自然学校なるものを7回ぐらい開校している。当初、例えば水生昆虫や蝶などの学習を主としたが、ここ数年は方向転換して、山へ行って、野山で木に登ったり崖を転がりあったりして遊ぼうということで、行っている。

この状態で、最近骨折したり、漆にかぶれたり、怒られることも結構あるが、自然学校ですからご理解を頂いて、一生懸命やっている。

それから中学校の部活動ですが、なかなかスキーの顧問の先生などいないが、社会体育のメンバーで部活動を今吟味してやっている。アルペン、ノルディック、それから剣道については社会体育のコーチを派遣して、部活動を一緒にやっている。

【県教委】

最初に30人規模学級は、これから進めていく、順次学年進行でやっていく形に皆様方、ご同意だと受け止めましたが、子どもの数を少なくして1人1人の子どもに目が行くように、そして十分な教育というか支援ができるように、これはどなたもご異論が無いことだと思うので、そういう形で是非進められるように、十分な検証をして進めていける形を作らなければならないと思っている。

それにつけましても皆様方それぞれの地域で、市町村で、あるいはその学校ごとに本当に色々な工夫をしながら、小中の連携だけではなくて、小中高まで、高校まで含めて連携の様々な形を作ってもらって。勿論保育園から含めて、保・小、それから全ての子ども達に体力向上、それから学力向上の形の色々な支援の手が届くような形を作っている事が本当に今日は大変いい勉強をさせて頂きながらお聞きできた。

【県教委】

お話をお聞かせいただいて、それぞれの市町村教委がある意味では独自財源を市町村長にお願いをして、いろんな事業、補強をして頂いている、そのことに改めて感謝を申し上げる。義務教育はやはり市町村が本気になってやっていくことと思う。地域の子どもは地域で育てると言い切って、長野県の教育は進めてきたので、県教委と市町村教委の連携、それと同じように、市町村部局と教育委員会部局がきちんと連携をしていく、そのことによって、財源確保をしやすくなる。それぞれの市町村教委が、市町村部局ときちんと水平支援、横の連携を取っていることを改めて感じている。

30人規模学級に関しましては、これは教育委員会だけが声高に言うことではなくて、私は、どうして市長会や町村会がもっと声を上げないのかと思っている。

今回のことも、もし県が学年進行できなくなる、もしくは中学1年も難しいという話になると、しわ寄せは市町村に行く。1年時に30人規模学級をやって2年時にクラス替えということは、基本的に保護者も先生達も認められない。そうすると市町村の負担でやらざるを得ないことになる。戻られたら、市長会、町村会で、この30人規模学級、ある意味で、今、長野県教育で一番大切な事と思うわけであり、それぞれの市町村にも、応援をして頂くように、よろしくお願いを申し上げたい。

(終了)